

第7回縮小社会研究会概要

時：2010年9月23日，13-17時，

場所：京都大学物理工学校舎107室，

1. 「科学技術史が示唆する未来は縮小社会—電力技術の観点—」松木純也：人間は科学技術の力で自然を人間中心に利用し尽くそうと奮闘してきた (Nature exists for the convenience of man. という自然観)。その結果かつてない物質的豊かさと引き替えに未曾有の危機に直面している。「縮小社会」になるしかない。
2. 「縮小社会とベーシックインカム」
 - 2-1. 「ベーシックインカムの概念とエンジニアリングの対応」佐藤国仁：エンジニアリングは拡大社会に向けての暴走を支えることもできるが、縮小社会を支えるにもエンジニアリングの力が必要なはずである。そして、エンジニアリングをその方向に再編するには具体的な目標が設定されなければならない。いま提案されているなかではベーシックインカムの概念がこの目標設定に有効だと思われる。
 - 2-2. 「ベーシックインカムの経済学的解説」宇仁宏幸：考え方としてのベーシック・インカムは、マルクスを含め、数世紀前からありますが、具体的政策としてのベーシック・インカムについては、1990年代に主にヨーロッパ諸国でかなり議論が行われています。この議論を紹介するかたちで、ベーシック・インカムの意義と問題点などを説明します。
3. 「森林と縮小社会」
 - 3-1. 「ドイツ林学における保続原則 (Nachhaltigkeit) と恒続林思想 (Dauerwaldgedanke)、そして現代社会におけるコモンズ論」北尾邦伸：カール・マルクスの晩年著作のどこかに、「富の源泉、その父は労働であり、その母は自然である」といった風なことが書かれていました。ケネーは「土地」の、ドイツ林学は「森林 (森林蓄積)」の自然にこだわって、収益性本意の生産や資本の時間に対抗していたのではないのでしょうか (Sustained Yield や Sustainable Development の追求)。現代社会にあって、それらをコモンズ論のなかで再構成し、縮小社会への道を構想したく考えます。
 - 3-2. 「①森林経営を視る二つの視点，②二つの視点のモデル化，③モデルから視た現代文明社会の特徴：<拡大、縮小、揺らぎ>」箕輪光博
4. 縮小社会の本の出版について：今，社会の持続が至上命令になっている．そこで，縮小社会というと，多くの人は江戸時代の生活，企業は破産を連想する．産業革命以来の拡大発展が当然という常識のなかで，縮小という言葉はタブーとなっている．しかし，持続または破局を防ぐには縮小しかあり得ない．縮小社会の意味を広く理解してもらうための1手法として，縮小社会というタイトルの本の出版が考えられる．そのことについて議論する．

各講演詳細は別ファイルに掲示しています。